

# 大阪商業大学学術情報リポジトリ

## 摩訶大将棋起源説反駁

|       |  |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: ja<br>出版者: 大阪商業大学アミューズメント産業研究所<br>公開日: 2021-07-15<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 清水, 康二, SHIMIZU, Yasuji<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/1006">https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/1006</a>  |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 摩訶大将棋起源説反駁

清 水 康 二

## I. はじめに

2019年に摩訶大将棋を中心とした日本の大型将棋を詳細に検討する成果が上梓された（高見2019）。研究内容は大きく2つの柱で構成されており、一つは古将棋図をもとに摩訶大将棋を中心とした大型将棋の指し方について復元をおこなったものである。もう一つは、『二中歴』に記載された平安小将棋、平安大将棋から各種の大型将棋が創作されたという定説に疑問を投げかけ、大型将棋の一種である摩訶大将棋が日本の将棋類の祖として創作され、それが小型化していき、その最終形態が平安小将棋であるという結論にいたるものである。つまり摩訶大将棋起源説とは（高見2019, p.63）、日本将棋の起源、変遷論をコペルニクスの的に転回した仮説（以下、摩訶説）である。

既存の定説を盲信せず、新たな解釈を導き出した点は大きく評価されるかもしれないが、これまでの先行研究を通じて確立された定説を覆し、真逆の仮説を提出するにあたっては、より慎重な姿勢が必要であろう。

ここでは高見友幸の著作のうち、日本将棋の変遷を論じた部分を中心に批判検討をおこない、あわせて摩訶大将棋の指し方の復刻部分については、将棋類の変遷とかかわる事柄に関して私見を述べるつもりである。

## II. 摩訶説からの定説に対する問題提起とそれに関わる検討

平安将棋を起源の将棋と見た場合の問題点として、下記の4つの事柄をあげている（高見2019, pp.7-8）。

1) 「初期配置では、歩兵が3列目に並び、2列目には駒がない。これは世界の他の将棋類（歩

兵相当駒は2列に並び、途中に空いた列はない)と比較したとき、原初の将棋としては奇異な配置である。」

- 2) 「平安将棋では、勝ち負けを決める駒の名前が王 (=King) ではなく、玉将である。また、世界の他の将棋類ではKingの駒の取り合いで勝敗が決まる。一方、平安将棋の勝敗は、玉将を取ることで決まるのではない。二中歴には、玉将以外の駒をすべて取ると勝ちという記述がある。」
- 3) 「駒の名称の由来が不明である。たとえば、玉将、金将、銀将は財宝を示すものであるとの説明が一般的であるが、前節の図2 - 図6に示されるとおり、大型将棋には、銅将、鉄将、石将、木将、土将といった別の将の駒が出現している。由来については、大型将棋の駒も含めての考察が必要であろう。」
- 4) 「旧興福寺旧境内からは11世紀の酔象の駒が出土している。ところが、平安将棋にも平安大将棋にも、この駒は配置されておらず、平安将棋を起源の将棋とする通説では説明が困難である。」

上記の指摘は聞くべきところもあるかもしれないが、先行研究において既に答えが示されているものが多い。摩訶説は、これまでの研究を「・・・仮説の段階であって、上記4点の問題を根本的に説明できていない・・・」とする(高見2019, p.8)。このように主張するならば、定説と真逆の主張をする以上、先行研究のおざなりな紹介にとどめるのではなく、その不備を詳しく検討すべきである。残念ながら大部な著書であるにもかかわらず、これら先行研究の是非を詳しく論じてはいない。

まずは摩訶説が指摘する4つの問題点が、果たして先行研究を基にしても答えが示されていないものかどうかを検討したい。

## 1. 初期配置歩兵3列目とすること

これについて先行研究を基にすれば、日本の将棋類の伝来経路を想定した「東南アジア伝來說」との関係でマックルック(写真1)を代表とするタイとカンボジアの将棋類に類例があることが既に指摘されている(ランドルフ1971)。これを根拠の一つとして「東南アジア伝來說」が提唱されたわけだが、このほかにも象棋、チャンギ(朝鮮将棋)は4列目である。これは「砲」駒の採用の結果4列目となったので、その先行形態は歩兵相当駒3列目配置と想定されている(木村2001, p.82, 図1)。

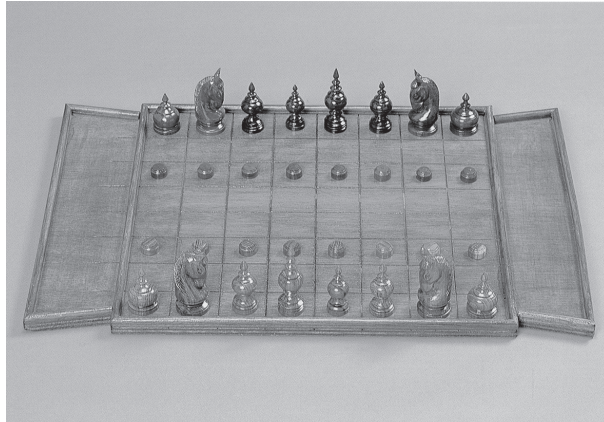


写真1 マックルック  
(清水ほか2016, p.3) より転載。

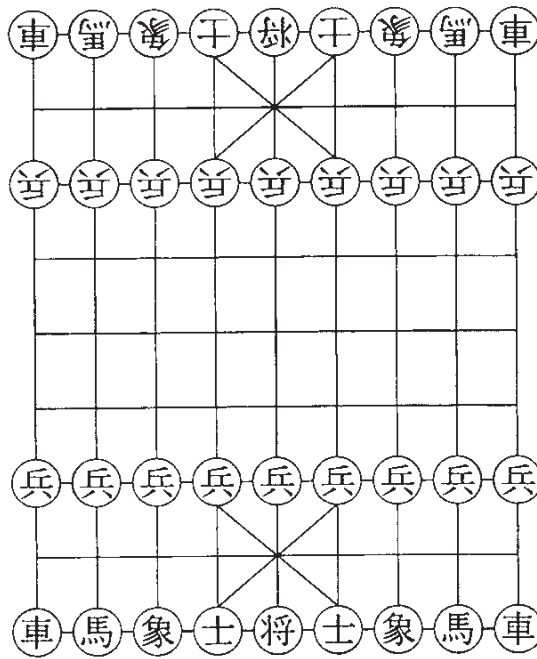


図1 木村義徳の想定する現行直前の象棋  
(木村2001) より転載。

東南アジア、東アジアの将棋類を除けば、インドのチャトランガを祖とする将棋類の歩兵相当駒の配置は2段目であり、木村義徳が想定するように歩兵相当駒3段目への変化は、東南アジアで生じたことか(木村2001, pp.70-71)、あるいは東アジアで起こったと考えるべきであろう。

東アジア、東南アジアの将棋類に歩兵相当駒3列目配置が確認できることこそ、平安小将棋が大型将棋より古い根拠になる。歩兵相当駒3列目配置を摩訶説のように「奇異な配置」とした場合、象棋類やマックルックに平安将棋の歩兵相当駒3列目配置が影響を与えたと考えなければならぬからである<sup>1)</sup>。したがって、この問題提起は有効ではない。

## 2-1. 平安将棋では王 (=King) ではなく玉将であること

これは資料の誤認に基づいた問題提起である。まず、北宋末とされる銅製象棋は、双方とも「将」である(図2)。その後、南宋代に至ると泉州湾沈没船出土象棋駒にみられるように「将」と「帥」の区別がある駒が確認できる(福建省泉州海外交通史博物館1987、清水2017、pp.96-97)。

現在のチャンギ(朝鮮将棋)は、「漢」と「楚」となって、楚漢戦争の印象が付されているが、李氏朝鮮時代の出土品に双方「将」(写真2)のものがある(한울문화재단연구원2012、)。また「チャンギ」という名称自体が、「チャン(将)キ(棋)」という漢字語である。つまり韓半島への象棋類の伝来時には、双方「将」だったのであり、日本へも両方「将」の将棋類が伝来したと想



図2 銅製象棋駒(「将」駒の直径約2.6cm)  
(張浦1988)より転載。



写真2左 李氏朝鮮時代のチャンギ駒  
(左と右はそれぞれ表裏)



写真2右 李氏朝鮮時代のチャンギ駒  
(左と右はそれぞれ表裏)

(한울문화재단연구원2012)より転載。

定できる（清水2017, pp.119-125）。他にも韓国の温陽民俗博物館の資料であるが、黒色の刻書で片面が「楚」、反対面が「将」の崩し字、赤色の刻書で片面が「漢」、反対面が「将」の崩し字の駒が知られている（清水2017, p.99）。この資料もチャンギの王将相当駒が古くは両陣営ともに「将」駒であったことを示すものである。したがって、この問題提起は有効ではない。

## 2-2. 玉将を取るのではなく、玉将以外の駒をすべて取ると勝ちとすること

『二中歴』には、小将棋を記した箇所に「敵玉一将則為勝」とあるが、これを単純に玉将以外の駒をすべて取ってしまわないと勝ちにならないと考えるのは無理がある。あくまで玉将を取っても勝ちではあるが、取られないように抵抗する結果、裸玉になって決着が付くことが多いことを示すものであろう。

もし、玉将を取ってはいけないルールを想定するなら、平安小将棋最強の駒である玉将はさらに強くなり将棋として成立しない<sup>2)</sup>。

上記のことからすれば、現行将棋と同様に敵の玉将を詰めると勝ちとなるが、敵を玉将だけにしても勝ちとする理解で問題はないと考える。また、裸玉になったほうが負けというルールは、必ずしも平安小将棋のみに見られるものではなく、幾つかの将棋類に存在するという指摘がある（梅林ほか2000、木村2017, pp.175-177）。

「敵玉一将則為勝」とは駒の威力の弱い平安小将棋で、最終的に玉将一つになっても、長く玉将が逃げ続けて勝敗がなかなか決しない事に対する附則と見るべきである。

## 3. 駒の名称の由来が不明であるということ

駒名の由来については、大型将棋の駒も含めての考察が必要との提言がなされているが、まさにその通りである。しかしながら、摩訶大将棋が日本の諸将棋より古いことを前提とする考察であってはならないことと共に、既に先行研究で仏教由来の名称があることは明白であり、特に古作登が指摘する『仏所行賛』と駒名の関連は見過ごすことができない（奥山1979、古作2014, 2015）。それに対して、摩訶大将棋において十二支を示す駒が揃わないことに加えて、陰陽五行説、陰陽道由来の名称を持つ駒名が摩訶説では明確に示されていない。

## 4. 興福寺旧境内の酔象駒出土は、平安将棋を起源の将棋とする通説では説明が困難ということ

このことについても、木村義徳が既にこの問題を説明済みである（木村2001, p.223）<sup>3)</sup>。16



### Ⅲ. 摩訶大将棋起源説の問題点

#### 1. 陰陽五行説との関係に対する疑問

摩訶説では、「摩訶大将棋は、陰陽五行説に基づいて設計された将棋である。」（高見2019, p.105）と結論づけている。しかしながら、摩訶大将棋が陰陽五行説と深く関係するというのであれば、単純に考えて、なぜ、十二支に動物を対応させた十二生肖のうち「卯」「未」「戌」に該当する兎と羊の犬の駒がないのであろうか<sup>4)</sup>。これはそれほど強い関連がない証拠とすべきであろう。

また、「摩訶大将棋の駒数の欄に12という数字が並ぶことに注目されたい。これは摩訶大将棋が陰陽五行説に基づいて設計されていることの現れである。」（高見2019, p.4）とするが、表1中の「走り駒」の数は14であるし、12という数字は東アジアの文化あるいは世界的にみても一般的なものとなっていないだろうか<sup>5)</sup>。仮に摩訶大将棋の創作に12という数字が強調されていたとしても、それは「陰陽五行説に基づいて設計された」というものではなく、創作当時の日本文化に内在していたものにすぎない可能性がある。「走り駒」の数は14であるうえ、少なくとも12という数から陰陽五行説を元に摩訶大将棋が創作されたという極端な結論を証明することはできない。

|       |    | 駒の種類        | 駒の数 |     | 種類 | 数  |
|-------|----|-------------|-----|-----|----|----|
| 摩訶大将棋 | 50 | 96<br>(192) | 歩き駒 | 人の駒 | 12 | 38 |
|       |    |             |     | 獣の駒 | 12 | 19 |
|       |    |             | 踊り駒 |     | 12 | 16 |
|       |    |             | 走り駒 |     | 14 | 23 |

表1 摩訶大将棋の駒の種類と駒数  
（高見2019, 表1）を一部改変。

また、「図20では、各五行の12種の駒を、駒の動きの対称性に注目することで、6種ずつの陽と陰の駒に割り振った。」（図4）とする（高見2019, p.20）。しかしながら、駒の陰陽を示した図20で「歩き駒（人の駒）」に該当する「将の駒（人）」には、表1で「走り駒」に分類した「奔王」がこれに入れられ、「瓦将」が除かれており整合性がない。

さらに駒の陰陽を示した図20で、「羅刹」と「夜叉」、「驢馬」と「桂馬」、「銅将」と「鉄将」、「仲人」と「石将」、「土将」と「歩兵」、「玉将」と「奔王」、「狛犬」と「獅子」、「香車」と「反



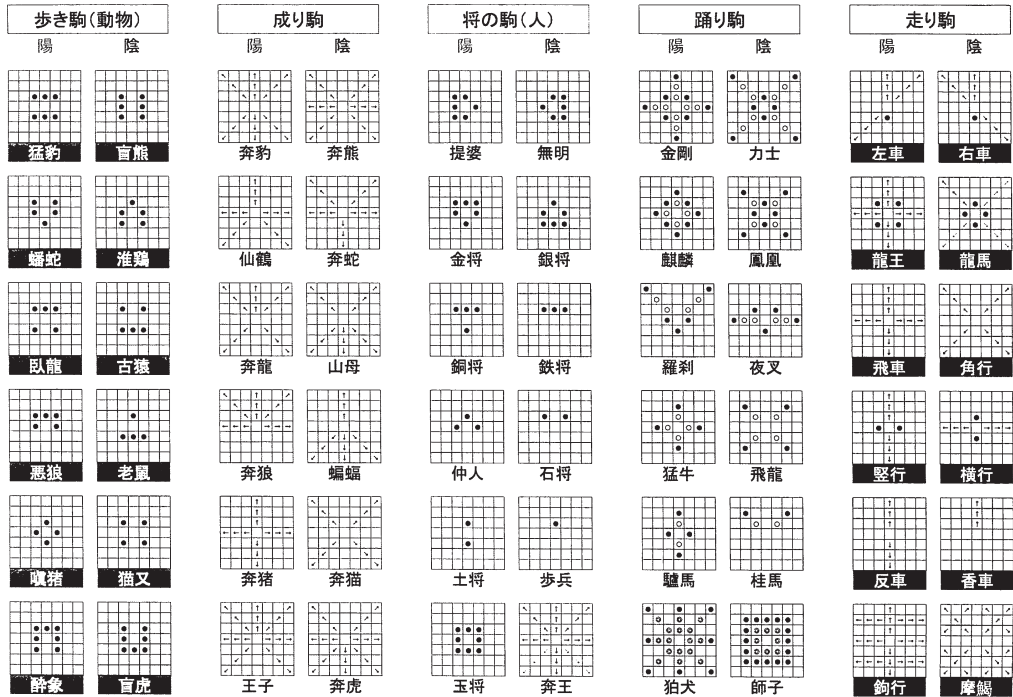


図4 摩訶大将棋の陰陽五行  
(高見2019, 図20) より転載。

車」は、対称の動きになっていない。また「奔猪」と「飛車」、「奔猫」と「角行」は同じ動きである。これらは摩訶大将棋創作時に、駒の対称性をそれほど厳密に考えていなかったことを示している。摩訶大将棋創作には、多数の駒名と動きが必要なものであり、これだけ駒の数が多ければ、創作者が対称に近い動きの駒を作り、それを近辺あるいは対称の位置に置くのは自然な行為ではなかろうか。加えて「横飛」「瓦将」に関して、図20から省かれ、陰陽の別が示されていないことも問題として指摘できる。さらに、「銀将」「仲人」「盲熊」「老鼠」「准鷄」「臥龍」の6種の駒に至っては、摩訶大将棋と陰陽五行説の関連を前提にして、どの古将棋図にもない動きを当てはめたものであり、このような資料操作をおこなった結果、摩訶大将棋の駒種が陰陽のペアを基に創作されていると主張しても意味はない。

前章に述べたように先行研究では、仏典由来の駒名が指摘されているにもかかわらず、摩訶説は明確な陰陽五行説由来の駒名をあげていない。摩訶大将棋が陰陽五行説によって設計されたとするならば、仏典由来の駒名よりも陰陽五行説由来の駒名が採用されてしかるべきと思うが、そうではないことからすれば、陰陽五行説と摩訶大将棋の関連をそれほど強調すべきでは

ないだろう。また、「動物の歩き駒、その成り駒、将の駒、踊り駒、走り駒が、たとえば、木、火、土、金、水に相当」（高見2019, p.20）するというが、五行が持つ基本的性質と比定した駒の属性について関連の有無が説明されていない。これでは、「摩訶大将棋には六十干支（駒の性質による12種の分類と駒の動きの対称性による陰陽各6種の分類で五行、十干、十二支を形成することができる）が組み込まれて・・・」おり、「・・・六十干支がきちんと出来上がっている。」（高見2019, p.65）とはとうてい言えないのである。

## 2. 摩訶説の「桂馬」の動きに関する疑問

著書のもう一つの柱として位置づけられる摩訶大将棋のルール復刻に際して、駒の動きについて各種文献を比較して、正しい動きを想定している。「古文書に記載された駒の動きについては、必ずしも信頼性が高いとは言えず、資料として使用するには注意が必要である。」（高見2019, p.16）とする。駒の動きが陰陽五行説に関連するかどうかは別として、各種古文書の駒の動きを批判検討するのは、研究方法として評価されるべきである。

しかしながら、摩訶大将棋の駒の幾つかに古文書に記載されない動きや陰陽に合うという動きを選択しているが<sup>6)</sup>、その当否はともかくとして、平安将棋から現行将棋、はてはチャトランガ、象棋などに桂馬相当駒が存在する「桂馬」の動きの評価が短絡的にすぎるように感じられる。他の駒に古文書に記載されていない動きを当てはめるようであれば、古文書に記載される「桂馬」の動きもはたして正確に記しているかどうかを批判的に検討すべきであるが、それがおこなわれた形跡はみられない。一見すると対角線を動くように見えるが、対角線の位置は本来的に桂馬の動きと近い。特に『象戯図』に掲載される大将棋（高見2019, 図52）に示された「桂馬」の点は向かって右上は対角線上に向かうが、左側はやや内側に点が落ちている。

通常の桂馬の到達点と同じ箇所 النقاطが打たれる例は、摩訶大将棋の駒として「獅子」と「無明」の成駒である「法性」しか存在せず、しかも両者は駒の四周に2重に点が落ちている。両者は動きを示す点の数からしても、「桂馬」の動きを示す点と比較が難しい。

また、著作の「表5 摩訶大将棋の駒の動きが記載される古文書」（高見2019, p.16）は、各古文書に示された駒の動きを記したものだが、現行将棋8種の駒の動きは「飛車」と「桂馬」以外は各種古文書の動きはすべて同じで、「桂馬」は3種の動きが記載されているものの「飛車」は一つの古文書で動きが異なるにすぎない（表2）。

上記を考慮するとあくまで点で示された駒の動きなので、通常の「桂馬」の動きと理解して良い可能性がある。摩訶大将棋の桂馬も小将棋の桂馬と同じ動きと考えるべきかを他の駒の動

|    | 象戯圖(摩訶大将棋) | 象戯圖(大大将棋) | 象戯圖(延年大将棋) | 諸象戯圖式 | 象戯圖式 |   |
|----|------------|-----------|------------|-------|------|---|
| 玉将 | ○          | ○         | ○          | ○     | ○    | 1 |
| 金将 | ○          | -         | ○          | ○     | ○    | 1 |
| 銀将 | a          | -         | a          | a     | a    | 1 |
| 銅将 | ○          | -         | ○          | ○     | ○    | 1 |
| 鉄将 | ○          | -         | ○          | ○     | a    | 2 |
| 瓦将 | ○          |           | a          | ○     | ○    | 2 |
| 石将 | ○          | -         | ○          | ○     | ○    | 1 |
| 土将 | ○          |           | a          | ○     | ○    | 2 |
| 仲人 | a          |           | -          | a     | a    | 1 |
| 歩兵 | ○          | ○         | ○          | ○     | ○    | 1 |
| 無明 | a          |           | ○          | b     | c    | 4 |
| 提婆 | a          |           | ○          | b     | c    | 4 |
| 奔王 | ○          | -         | ○          | ○     | ○    | 1 |
| 龍王 | ○          | -         | ○          | ○     | ○    | 1 |
| 龍馬 | ○          | -         | ○          | ○     | ○    | 1 |
| 飛車 | ○          | a         | ○          | ○     | ○    | 2 |
| 角行 | ○          | -         | ○          | ○     | ○    | 1 |
| 豎行 | ○          | -         | ○          | ○     | ○    | 1 |
| 横行 | ○          | -         | ○          | ○     | ○    | 1 |

|    | 象戯圖(摩訶大将棋) | 象戯圖(大大将棋) | 象戯圖(延年大将棋) | 諸象戯圖式 | 象戯圖式 |   |
|----|------------|-----------|------------|-------|------|---|
| 盲虎 | ○          | a         | ○          | b     | b    | 2 |
| 猛豹 | ○          | a         | ○          | ○     | ○    | 2 |
| 醉象 | ○          |           | -          | ○     | ○    | 1 |
| 惡狼 | ○          | -         | ○          | a     | a    | 2 |
| 嗅猪 | a          | -         | a          | ○     | ○    | 2 |
| 猫叉 | ○          | -         | ○          | ○     | ○    | 1 |
| 盲熊 | a          | -         | b          | c     | c    | 3 |
| 老鼠 | a          | b         | c          | d     | d    | 4 |
| 蟠蛇 | a          |           | ○          | a     | a    | 2 |
| 古猿 | a          |           | b          | ○     | ○    | 3 |
| 淮鷄 | a          |           | a          | a     | a    | 1 |
| 臥龍 | a          |           | a          | a     | a    | 1 |
| 反車 | ○          | -         | ○          | ○     | ○    | 1 |
| 香車 | ○          | -         | ○          | ○     | ○    | 1 |
| 左車 | a          | ○         | b          | a     | a    | 3 |
| 右車 | a          | ○         | b          | a     | a    | 3 |
| 鈎行 | ○          | ○         | ○          | ○     | ○    | 1 |
| 摩謁 | ○          |           | ○          | ○     | ○    | 1 |
| 横飛 | ○          |           |            | ○     | a    | 2 |

|    | 象戯圖(摩訶大将棋) | 象戯圖(大大将棋) | 象戯圖(延年大将棋) | 諸象戯圖式 | 象戯圖式 |   |
|----|------------|-----------|------------|-------|------|---|
| 桂馬 | ○          |           | ○          | a     | b    | 2 |
| 飛龍 | ○          | -         | ○          | ○     | ○    | 1 |
| 猛牛 | a          | b         | c          | a     | a    | 3 |
| 麒麟 | ○          | -         | -          | a     | a    | 2 |
| 鳳凰 | ○          | -         | -          | a     | a    | 2 |
| 獅子 | ○          | -         | -          | ○     | ○    | 1 |
| 驢馬 | ○          |           | ○          | a     | a    | 2 |
| 狛犬 | ○          | ○         | -          | ○     | ○    | 1 |
| 力士 | ○          |           | a          | b     | b    | 3 |
| 金剛 | ○          |           | a          | b     | b    | 3 |
| 羅刹 | ○          |           | ○          | ○     | ○    | 1 |
| 夜叉 | a          | b         | ○          | b     | b    | 3 |

表2 摩訶大将棋の駒の動きが記載される古文書  
(高見2019, 表5) より転載。

きと同様に検討した方がよからう。

仮に摩訶大将棋を日本将棋の祖と考えた時、摩訶大将棋の「桂馬」の動きが現行将棋の「桂馬」の動きと異なるのは、不都合な証拠となる。現行将棋の「桂馬」は特殊な動きであって、二方桂、八方桂の違いはあるもののチャトランガ、チェス、象棋などと基本的な動きと配置が共通することの説明が難しいからである。摩訶大将棋を日本の将棋類の祖とするならば、現行将棋の「桂馬」の動きがチェスの「ナイト」や象棋の「馬」と基本的な動きと配置が偶然に一致することなどあり得ない。

### 3. 摩訶大将棋の「銀将」の動きに関する疑問

摩訶説では「陰陽のペアである金将と銀将の動きが、上下反転であるべき・・」(高見2019, p.25)とするのだが、古将棋図にみられる駒の動きを批判検討する必要性は認めるが、これを変更す

るのはさすがに過度な資料操作であるとの誹りを免れない（図5）。現行将棋「銀将」と同じ動きは、東南アジアのタイのマックルックの「コン」と同じ動きであり、日本の将棋類特有のものではない。しかも、その正否はともかくとして、「銀将」と「コン」の共通の動きが、日本将棋の東南アジア伝来説の根拠の一つとなっている（ランドルフ1971）。また、アル・ビールニが11世紀前半の北インドで見た「象」の駒の動き（図6）とも同じであり（Murray1913, p.59）、古い時期の銀将相当駒の動きである可能性が高い。しかも前稿で述べた古将棋図の「桂馬」の動きには3種があるのに対して、「銀将」は古将棋図の動きでもすべて同じ現行将棋の「銀将」と同じである（高見2019, p.16）。

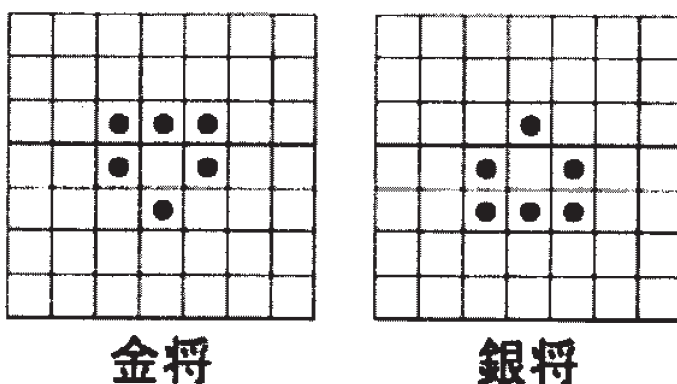


図5 摩訶説による銀将の動き  
（高見2019, 図26）を一部改変。

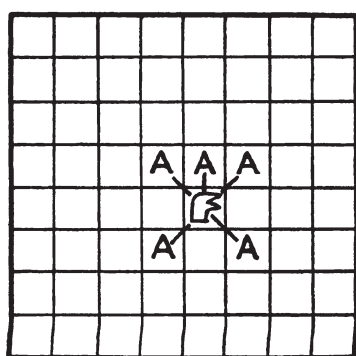


図6 アル・ビールニが目撃した象の動き  
（Murray1913）より転載。

上記の資料の存在にもかかわらず、摩訶大将棋の「銀将」の動きを「金将」の上下反転とするのは、「摩訶大将棋の復刻」というより「摩訶大将棋の改良あるいは改変」となってしまふことを懸念する。

加えて、現行将棋の「桂馬」の動きと配置が摩訶大将棋を日本将棋類の祖とすることへの反証となることを前項で述べたが、現行将棋の「銀将」の配置も他の将棋類の「銀将相当」駒の配置と一致することから摩訶説が成り立たないことを示している。

#### 4. 黎明期の摩訶大将棋と大大将棋を交点置きとすることへの疑問

『諸象戯図式』の各種大型将棋の見出し欄で大大将棋のみが「縦横十七目」と書かれ、他の大型将棋は「間」と書かれていることから（高見2019, pp.100-101）、大大将棋を交点置きの将棋とする。しかしながら現在の用法でも原稿のマス目、方眼紙、籠目、網目、篩の目、猪目などをみればわかるように、交点を「目」とするのではなく、空間を「目」とするのが通常の使い方である。「ここで、目というのは、縦横に引かれた線の交点の部分のことである。」（高見2019, p.100）とするが、囲碁盤の交点を「目」と呼ぶのにつられた誤認である。古将棋図の見出しに「目」と記しながら、升目に駒を配置した図を掲載しているのだから、古将棋図を記した人物は、枡目を「目」と呼んで違和感がなかったことを示している。

盤の定寸法は、享保二年（1717）刊の『大匠雛形』に示すものが、一番古い記述である<sup>7)</sup>。ここには下記のように、「目」と「間」が同時に使用されている。「目」と「間」が併用される古将棋図の見出し欄と同様である。

「大将棋盤、広さ一尺六寸にして目数は十五間に割り、長さは目一つ長くして十五間にすべし、厚さ二寸六分、足の高さ三寸六分、太さ二寸二分、足は目一つ入れて付くべし。中将棋盤、広さ一尺四寸、十二間に割る、長さ一目長くすべし、それを十二間に割る、厚さ二寸二分、足の高さ二寸八分、太さ一寸八分、足の入りは八分なり。小将棋盤、長さ一尺二寸にして九目に割る、広さ一目狭くして九つ目にすべし、厚さ一寸八分と。」（幸田1909）

古将棋図、二中歴にある「目」は、前述したように枡目と考えて問題ない。

#### 5. 摩訶大将棋等と平安京条坊の関係に対する疑問

摩訶大将棋説では黎明期の摩訶大将棋と大大将棋を交点置きと想定する（高見2019, pp.82-84）。そして交点置きの摩訶大将棋の駒配列は第一次平安京の条坊と一致し、枡目置きに変わった摩訶大将棋は、第二次平安京（京域を二町分北に拡張したもの）の条坊と一致するという。しかしながら、平安京の京域が当初より拡張したというのは、ごく少数の研究者が主張するのみで、平安京の京域は建都時点から第二次平安京とされるものと同じであり京域の拡張はおこなわれなかったというのが定説である。

摩訶説では瀧浪貞子（瀧浪1991a）と桃崎有一郎（桃崎2016）の著作を平安京拡張説としてあげるのみだが、自身の仮説の正否に関わる論拠に対しては、もう少し慎重な態度が必要であろう。特に瀧浪が『山槐記』（12世紀中葉）の記述から主張したものは、平安京域の拡張ではなく、あくまで平安宮域の拡張である（瀧浪1991b・1994）。瀧浪は第一次平安京を藤原京型（宮

北辺が京北辺より内側にあるもの)とし、その後に第二次平安京である北闕型(宮北辺と京北辺が一致するもの)に移行したと想定した。つまり、瀧浪説は、平安京の境域が拡張したというものではなく、平安京の北辺の位置は変わらずに平安宮の北辺の位置が北方に二町拡張されたというものである(図7)。

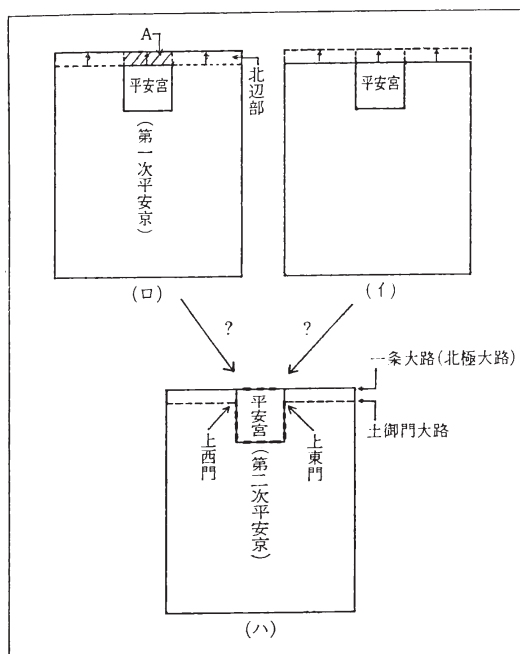


図7 瀧浪説による平安京の拡張 口→ハ  
(瀧浪1991b)より転載。

これに対して、桃崎の著書では、「多量の収穫物を収納する蔵を新設するための空間が大内裏内部に不足したため、大内裏を二町分だけ北に拡大し、それに合わせて平安京自体も同じ分だけ北に拡大されたという・・・」と瀧浪説を紹介する(桃崎2016, p.122)。これは瀧浪が主張する平安宮の拡張を平安京の拡張と誤認したものである。

さらに、瀧浪の主張する平安宮の拡張説に関しても、文献史学、考古学の分野から批判が提出されており、賛同者は少ない。文献史学の観点からは瀧浪の想定する宮域の拡張時期である9世紀末から(瀧浪1991b, p.340)、「・・・少なくとも三百年後の史料にしか出てこない理由については、・・・テキストクリティークが加えられてしかるべき・・・」で「・・・少なくとも『山槐記』の記載にみえたかぎりであれば、あくまで忠親の論理・解釈の問題であって、史実とは別次元のもの・・・」とする。(井上1993, p.113) また、平安宮北辺に大蔵を中心とする官衙

域を描く『南都所伝宮域図残欠』の成立が807年以前に遡るとい見解が出されており、このことからしても平安宮の拡張説は成り立たないことが指摘されている（東野1983、山中1997, p.149）。

考古学的観点からは、「…平安京の発掘調査成果にまったく関心を示されないこと…」や「…北辺部（上東門・上西門を結ぶ線より北側）についてはまだ発掘の例はないが、他の場所ではほぼ平安宮図と合致する遺構が確認されていて、現在のところ流布している平安宮図を否定し氏の説を成立せしめる所見はない…」（井上1993, p.115）と指摘されている。また、平安京の直前の都である長岡京の様相をみると「長岡宮では、少なくとも、後期には「北辺」が成立し、大蔵等の官衙が宮域内に取り込まれて」おり、「…この新たな形態こそ平安京に継承され…」「…平安京には当初から北辺二町に官衙域が設けられていた」と想定されている（山中1997, pp.148-149）。

文献史学、考古学の研究成果からすれば、平安宮の拡張説はおろか、平安京の拡張説は成立しがたいものである。

また、摩訶説では摩訶大将棋と大大将棋は、平安京の条坊図と合わせた場合、90°異なった復元をおこなっており、論理に一貫性がない。加えて平安小将棋も「横9×縦10」で復元するのだが、なぜその後、「横9×縦9」の現行将棋盤に変化したのか説明できない。

平安京の条坊と将棋盤の一致を強調するが、交点置きに確かな根拠がないうえ、一致するのは古将棋図にある歩兵間7目の枡目を4目と改変した場合である。前述したように大大将棋は、摩訶大将棋の条坊一致と90°ずらさなければならないし、歩兵間4目にもならない。古将棋図では、いずれも歩兵間は4目とならないのである。

## 6. 宝応象棋を大型将棋と理解することについての疑問

唐代に張讀が記した『宣室志』中に盤雙六を題材とした小説があることが紹介された（木子2018）。新しく盤上遊戯に関する史料が日本語訳されたことは、遊戯史研究上とても有益である。これは牛僧孺が記した『玄怪録』「岑順」の物語と基本構成は同じであり、「岑順」の物語を原型として執筆されたものであろう<sup>8)</sup>。

そこでは怪異の正体として「二十一個の目を持った二つのもの」が賽であり、「三十人の和尚と道士」が白黒の駒であったことが結末に明かされる。摩訶説では上記の賽の数、駒数を正確に記すことから、宝応将棋の記述は大型将棋の可能性があるとする（高見2019, pp.89-92）。つまり、「岑順」の物語では、「1）数百の騎馬武者が現れ、縦横に馳せめぐっている。身のた

けはいずれも、五、六寸の小人だが 2) 旗さしものは何万と数えられ、風や雲のごとくすみやかに、両側に分かれて陣を取る・・・4) 戦死者と負傷者が床一面に倒れる 5) 数百人は西南の隅に逃げこんで、どうやら敵の手をのがれた・・・7) その前には金で作った将棋盤があって、駒がいっぱいにならんでいる」(高見2019, p.91) という記述をもって『玄怪録』に記された宝応将棋を大型将棋とするのである。

ここではまず「岑順」の物語についての評価を記す。「岑順」の物語は、家に現れる怪異の正体が最終的に家の下にあった古い墓に副葬された象棋駒であったことが明かされることこそ物語の要点である。

この怪異小説は上質の探偵小説でもあって、その条件を満たすためには、「文章中に答えを導き出せる情報を記すこと」「読者が答えを知った時、それを面白く思うこと。」「謎が簡単すぎないこと」が必要である(清水1998)。この点からすると「岑順」の物語の読者に対する暗示は、「駒の名前」(二文字にして、簡単に読者が駒の名前とわからないようにしている。)、駒の動き方の記述、「六甲」(六種類の駒。当時の象棋の駒種。雙六の駒数に通じる。)である。その他の記述は、上記を否定しなければ、読者を誤誘導して結末を簡単に明かさないのでかまわない。したがって、1, 2, 4, 5が戦場を誇大に表現しても小説上は不正義ではないし、7も盤の大きさと駒数の問題に過ぎない。現行将棋が現行将棋盤の上にはばらまかれていても「駒がいっぱいにならんでいる」という表現をしても何の不自然さもない。逆に『宣室志』をもとに駒数の確かさを強調すると「岑順」の物語では「数百」(各陣営)「何万」の駒が必要な将棋類を想定せざるをえない。あり得ない解釈である。

盤雙六は盤と駒に特徴が少なく、詳しく賽と駒の数を記さざるを得なかったためか、「岑順」の物語の剽窃としても、『宣室志』の盤雙六に関する怪異談は躍動感に欠けるものとなっている。その理由として盤雙六は駒の種類と動きにも特徴が少なく、詳しく賽と駒の数を記すのみで、物語の誇張が効かなかつたためではなかろうか。

その他にも宝応将棋が大型将棋でない証拠として「記される駒の名前が、砲以外の象棋相当駒しかなく、大型将棋に対応する駒がない」こと「六甲が砲を除く象棋の駒種数と一致」(現行象棋の「将」「士」「象」「馬」「車」「卒」の6種)することがあげられる。特に『宣室志』での盤雙六の賽と駒数の記述を高く評価するなら、『玄怪録』「岑順」の物語に記述される「六甲」は宝応象棋の駒種数と考えられる。『宣室志』の雙六駒数の暗喩は、「岑順」の物語に使用された象棋の駒種に関する暗喩を参考にして考えられたものである。宝応将棋は大型将棋ではなく、現行象棋の前段階、「砲」駒が加わる以前のものだと判断すべきである。



## 7. 31枚の駒数の増減

摩訶説が提起する問題で、摩訶大将棋（各陣96枚）、大将棋（各陣65枚）、平安大将棋（各陣34枚）において、摩訶大将棋→大将棋→平安大将棋という変化を想定し（図8）、31枚の駒の取り除きがみられるとする（高見2019, pp.63-65）。また各種大型将棋と平安将棋の駒種の包含関係を検討し、平安小将棋、平安大将棋、大将棋、摩訶大将棋の順で駒種が多く、より大型の将棋はより小型の将棋の駒種をすべて含むことを図（図9）で示した（高見2019, p.64）。「随所に31

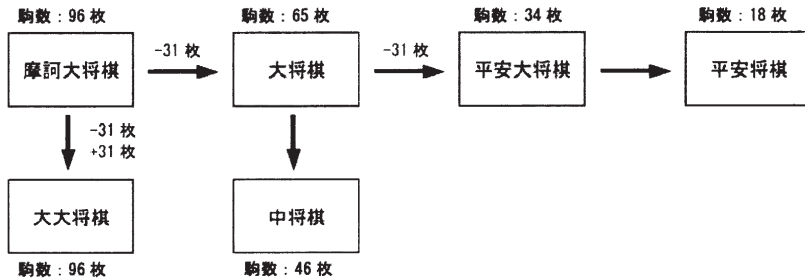


図8 摩訶説による将棋の成立順  
（高見2019, 図56）より転載。

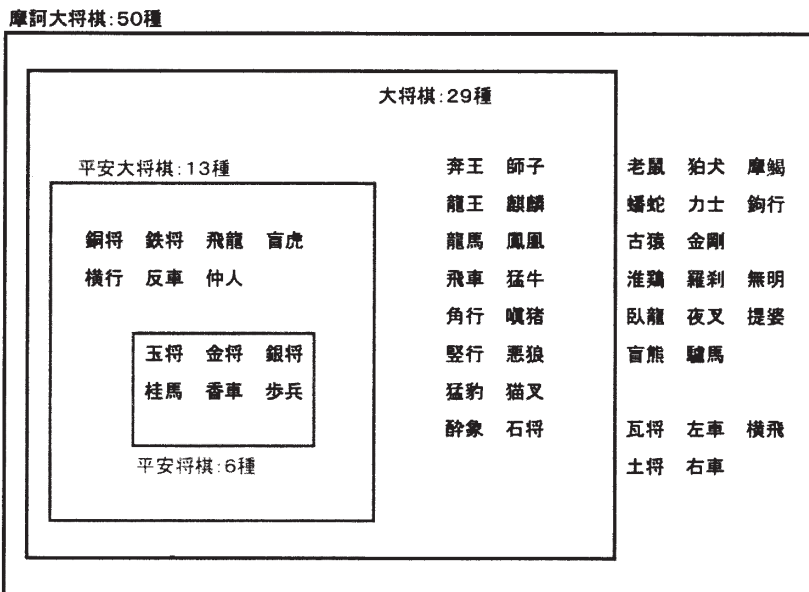


図9 摩訶大将棋等の包含関係  
（高見2019, 図54）より転載。

枚の駒の取り除きが見られること自体仕組みられた何らかがあることを連想させる・・純粋に遊戯の改良という・・目的であれば、31枚に拘る必要はない・・」(高見2019, p.65)という筆致こそ陰謀史観を匂わせるものの、31枚の加除と摩訶大将棋、大将棋、平安大将棋に関する駒種の包含関係への着目は、単純な解釈だからこそ説得力がある<sup>9)</sup>。駒種の包含関係と駒数の変化をみると摩訶大将棋、大将棋、平安大将棋の関係と創作には「何らかの意図があった」と考えざるをえないのではなからうか。

しかしながら、摩訶説の問題点は、「摩訶大将棋では六十干支がきちんと出来上がっている。」ため日本の将棋類は「摩訶大将棋を起源とする」ことから、31枚の駒が順次除かれて平安大将棋に至りもっとも新しいものが平安小将棋と想定していることである。これについては、Ⅲ-1で既に検討したように「摩訶大将棋では六十干支がきちんと出来上がっている。」とは言えないため、摩訶説のように摩訶大将棋を起源と考える必要はなく、通説通りに平安小将棋から平安大将棋が作られ、その後、31枚の駒が加えられて大将棋が創作され、それにさらに31枚の駒が追加されることによって摩訶大将棋が作り上げられたと考えて問題がない。

31枚という駒数であるが、摩訶説における重要な論拠であるにもかかわらず、どのような意味があるのかについて著作内では明らかにされていない<sup>10)</sup>。

通説通りに考えて、平安小将棋から平安大将棋が作られ、その後に大将棋、摩訶大将棋が創作されたと考えるならば、この31枚という駒数の増加は、摩訶説のように平安京の縮小と将棋盤の大きさが関係を持ち、ある程度の時間幅で大将棋、摩訶大将棋が作られたということではなく(高見2019, pp.84-85)、平安大将棋をもとに大将棋が作られ、それとほぼ時を同じくするように摩訶大将棋が作られたという創作の同時性を物語るのではなからうか。大将棋から摩訶大将棋の創作までに、必ずしも長い時間を見積もる必要はないし、極論を言えば、同時でもよいのである。

古将棋図に平安大将棋が掲載されていないことからすると、平安大将棋が指されていないと考えられる戦国時代末に摩訶大将棋、大将棋が創作されたと考えるのは難しく、普通唱導集(13世紀末～14世紀初頭)に大将棋が確認できるのと矛盾しない(佐伯1993)。平安大将棋が指されなくなるまでに摩訶大将棋、大将棋が平安大将棋をもとに創作され、大将棋と摩訶大将棋はほぼ同時に誕生したのではなからうか。

#### Ⅳ. まとめ

新たに提出された摩訶説について、定説を墨守する立場から批判的に検討した。これまで述べてきたことを簡単に振り返る。

摩訶大将棋の「人の駒12種」、「獣の駒12種」、「踊り駒12種」という数字で陰陽五行説と関連づけるのは危険である。「走り駒」は14種である。また陰陽ペアの駒と記されたものに、必ずしも対称の動きとなっていないものが見受けられる。駒種が陰陽のペアで創作されたという主張も、陰陽五行説との関連を前提とした資料操作の結果に過ぎず、摩訶大将棋、大大将棋が陰陽五行説に基づいて設計されたという仮説は、今のところ根拠が薄い。もちろん摩訶大将棋創作時に陰陽五行思想は日本文化に取り入れられていたのだからそれが、直接的、間接的に利用はされたものの、仏教思想の影響をより強く考慮すべきであろう。

黎明期の摩訶大将棋、大大将棋を交点置きと想定するが、枡を「目」と呼ぶことは通常のことであり、どちらかというとき交点を「目」とする囲碁の使用法が異例であろう。大型将棋の交点置きを積極的に推す根拠はない。

加えて摩訶大将棋と平安京の条坊の一致を強調するが交点置きに確かな根拠がないうえ、よって立つ平安宮平安京拡張説も誤解やごく少数の研究者が主張するにすぎない。しかも古将棋図にある歩兵間7目の升目を4目と改変した場合にしか平安京の条坊とは一致しない。大大将棋は、摩訶大将棋の条坊一致方向と90°ずらさなければならないし、歩兵間4目にもならない。

摩訶大将棋は指せば面白いらしいが、平安小将棋は「玉将」が最強の駒であることもあって、現行将棋に慣れた現代人が指しても面白くもなんともない。仮に摩訶大将棋から平安小将棋が誕生したとするなら、「桂馬」「香車」はもっと強力な駒が採用されたはずである。そうすれば、後々、飛車、角行を追加しなくてもよい。「銀将」「桂馬」「香車」がチャトラングを祖とする将棋類の基本的な駒配置と一致することも、平安小将棋が古い将棋類の特徴を有し摩訶大将棋に先行することを示している。

新しく指摘された『宣室志』の盤雙六に関わる記述から「岑順」の物語に描かれる宝応将棋は大型将棋類とする見解が示されたが、いずれの根拠も有効ではなく、盤雙六の暗喩として駒数が使用されたことからすれば、「岑順」の物語で文中に使用されている「六甲」は当時の象棋の「六」つの駒種を示している。宝応将棋は大型将棋類ではない。

摩訶説が提唱し、本稿において31枚仮説としたものは有力な仮説と考える。ただし、平安小将棋から大型将棋が成立する変遷感でも理解可能であるし、どちらかというとき大将棋、摩訶大

将棋創作の同時性を物語る証拠となるのではなからうか。

摩訶説では交点置きの摩訶大将棋の成立を9世紀後半以前に想定するようだが（高見2019, pp.82-84）、文献資料、出土資料が決定的に不足しており、9世紀後半に日本列島で将棋類が指されていた痕跡はない。

本文中では批判しなかったが、12世紀末～13世紀初頭の『明月記』の記述をもとに、「・・呪術のツールとしての大型将棋を用いた、天変地異の鎮圧・・」がおこなわれたと想定している（高見2019, pp.94-96）。正治元年（1199年）五月十日条の洪水記事に挟まれた御前での「将碁」を指した記述をもとに大胆な想定をするのだが、翌十一日天候が回復した日にも「将碁」は指されるし、そのほか特に災害が起こっていない日にも「将碁」は指されている。効果抜群の「呪術のツール」を平時に使用する必要などなく、「呪術のツール」として指されたということは、想像の域を出ていない<sup>1)</sup>。

上記の検討結果からは、平安小将棋から各種大型将棋が誕生したという定説を変更する必要はない。

## 【謝辞】

本稿を執筆するにあたっては、下記の方々のご教示と援助を受けました。記して感謝いたします。

家原圭太、宇野隆志、古作登、高見友幸、松村政樹、箕倉永子（敬称略）。

本稿は中山隼雄財団2018年度助成研究（B）「将棋東南アジア伝来説の提唱者アレックス・ランドルフと日本」（研究代表者：奈良県立橿原考古学研究所 清水康二）による研究成果の一部である。

## 【註】

1) 2020年1月11日（土）に大阪商業大学アミューズメント産業研究所主催（於大阪商業大学サテライトオフィス CURIO・CITY）でおこなわれた「摩訶大将棋」に関する研究会の高見友幸の口頭発表において、平安小将棋が各種大型将棋より新しく創作されたという摩訶説をさらにコベルニクス的に転回させて、平安小将棋が中国の象棋成立に影響を与えた可能性が示唆された。あくまで口頭発表なので、その見解の詳細を理解できていないが、摩訶説では唐代に大型象棋の存在を想定し、それが何らかの形で摩訶大将棋の創作に影響し、大型将棋類が小型化したものが平安小将棋であるとする。さらにその平安小将棋が中国に環流したものが象棋ということになるが、このようなことがはたして実際に起こりうるであろうか。

また、マックルックの歩兵相当駒3段目配置に関しては、16世紀以後の東南アジアで形成された日本人町に居住した日本人の指したであろう将棋の影響を想定する説もあることを付け加えておく（松岡2009, p.46）。

2) 取り捨てる場合、単純に先手必勝となるのではなからうか。相手の玉将を取ってはいけけないのなら、玉将近辺の歩を突き、その後は玉将を繰り出していけば良い。

- 摩訶説は平安小将棋の取り捨てを想定しているはずだが、摩訶説の一部に玉将と金将の可動範囲を制限するものがあるものの、想像の域を出ていない。なぜなら玉将の行動範囲を制限する将棋類は日本では確認されていないからである。仮に象棋の九宮のように行動範囲が制限されていたとしても、玉将は平安小将棋では最強の駒なので、この場合も強力な駒がないと引き分けが多発するのではないかという疑念がある。
- 3) 筆者の記憶によると、これについて最初に指摘したのは、興福寺駒の出土後に掲載された木村の新聞記事ではなかったかと思う。元記事を探すことができないものの、木村は興福寺駒出土後の早い段階で、一乗谷朝倉駒との関係により38枚制小将棋の存在を指摘した。このことは、木村義徳の研究者としての優秀性を物語るものである。
- 4) 泰将棋には十二生肖の駒が揃っている。ただし、「卯」に関しては「驢馬」駒（和名抄にウサギウマとの注釈）をあて、「戌」は「悪狼」駒をあてる（高見2019, p.107）。「未」に対応する駒の不在は解消できていないし、他の駒と違って、「驢馬」と「悪狼」が直接的な駒名にならない理由は説明されていない。
- 5) 1ダース、十二使徒、イスラエル12部族、冠位十二階、テレビのチャンネル数、オリュンポス12神、十二単など。もちろん陰陽五行説起源のものもあるが、12という数字が古くから日本文化に浸透していたということである。
- 6) 「・・象戯圖の他の箇所または他の古文書から取られた・・」駒が、「無明」「提婆」「噴猪」「蟠蛇」「古猿」「左車」「右車」「夜叉」である。「・・どの古文書の情報も採用せず妥当な動きを考案した・・」とする駒が、「銀将」「仲人」「盲熊」「老鼠」「准鶏」「臥龍」である（高見2019, p.14）。
- 7) 『大匠雛形』については、原典にあたっておらず、幸田露伴の「将棋雑話」（幸田1909、塩谷1972）による。
- 8) 張説は『玄怪録』を記した牛僧孺と姻戚関係にあるとされる（竹田ほか2008）。
- 9) 図8（高見2019, 図56）において摩訶大将棋から大大将棋への駒数の加除は「-31」「+31」とするが、駒数と駒種を混用している可能性がある。大大将棋に追加された駒種は31種で、29種は各1枚だが「奇犬」「木将」は各2枚あるので、追加枚数は「+33」となるのではなかろうか。
- 10) 註1に記した研究会の席上で、高見友幸は「31」という数字に関して和歌との関係を示唆したが、詳細については理解できなかった。「31」という数字の持つ意味については、今後の見解の公表を待ちたいと思う。
- 11) 加えて「将碁、将碁、将碁、象戯、将騎と5種類の表記が使われているが、将碁とそれ以外の表記には、使い分け・・」あるいは「・・もっと厳密な定義・・」を想定している（高見2019, p.96）。しかしながら、これについても論証に成功していない。建暦三年四月二十七日条の心身を衰弱して死期を悟った人物が、「将碁」を指すものの駒の動きを思い出せなくなったという記述に対して、その「将碁」は「駒が6種類の小将棋の場合、動きを忘れてしまうということは考えにくく、この将棋は大型将棋・・」と想定する（高見2019, p.95）。しかし、これは読み間違いであって、神経衰弱した当人が、小将棋の駒の動きすら忘れてしまった異常事態を記したものと考えるべきである。大型将棋類の駒の動かし方は、大きければ大きいほど、普通の状態でも憶えているのは難しい。
- 〔補注〕初校の段階で菅谷北斗星が、小型将棋と大型将棋の前後関係に触れている文章を知った（菅谷1978, pp.38-42）。原典が明確にされていないので、執筆年代を確認していないが、第二次大戦前のものようである。そこには、当時、日本将棋の変遷を「大将棋から中将棋、それから小将棋即ち日本現在の将棋」と考える人と「古局から変化改良されたものだろう」という見方をする人があったことを記している。北斗星はここで、「私は「中将棋の進化説」だったのですが、この盤の発見を契機にここに潔く前説を棄て「将棋は古局から」と改説・・」した。改説の動機となった「この盤」とは細川護立侯爵が所蔵していた件の漢代とされる三人象棋盤であって、そのこと自体は北斗星の資料批判の甘さを露呈している。しかしながら、当時において中将棋を含む大型将棋の成立を小将棋よりも古く考える見立てを持つ人がいたことを示しており、将棋研究史上において興味深いと思われるので、ここに付記しておく。

〔参考文献〕

- 朝倉氏遺跡調査研究所（編）『特別史跡一乗谷 朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ－朝倉館跡の調査』福井県教育委員会 1984
- 井上満郎「書評 瀧浪貞子著『日本古代宮廷社会の研究』」『史学雑誌』102-3 1993
- 梅林勲・岡野伸『世界の将棋』将棋天国社 2000
- 奥山紅樹「桂香の由来と五宝の概念について」『将棋世界』43-3 日本将棋連盟 1979
- 木子香「中国における盤双六研究の現状について」『大阪電気通信大学人文科学研究』20 大阪電気通信大学 2018
- 木村義徳『持駒使用の謎 日本将棋の起源』日本将棋連盟 2001
- 幸田露伴「将棋雑話」『露伴叢書』前編 博文館 1909
- 古作登「平安時代の酔象駒発見から日本将棋の進化過程を推測する ―将棋は仏教寺院で伝典を参考に改良が進められた―」『大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要』16 大阪商業大学アミューズメント産業研究所 2014
- 古作登「最古期の日本の将棋「平安将棋」から「平安大将棋」、「大将棋」への進化に関する考察：取り入れられた駒の性能、命名の理由を推測する」『大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要』17 大阪商業大学アミューズメント産業研究所 2015
- 佐伯真一「「普通唱導集」の将棋関係記事について」『遊戯史研究』5 遊戯史学会 1993
- 塩谷賛『露伴と遊び』創樹社 1972
- 清水康二「古式象棋と将棋の伝来」『月刊 考古学ジャーナル』428 ニューサイエンス社 1998
- 清水康二「東アジア盤上遊戯史研究」明治大学大学院文学研究科 2016年度博士学位請求論文 2017
- 清水康二、鈴木一議、高橋浩徳、松村政樹ほか 2016『将棋類の伝播に関する研究 ―タイ将棋マックルックを中心に―』大阪商業大学アミューズメント産業研究所 2016
- 菅谷北斗星「将棋と駒の考証」『菅谷北斗星選集 秘録篇』日本将棋連盟 1978
- 鈴木一議「名勝 奈良公園・興福寺旧境内」『奈良県遺跡調査概報 2013年度（第二分冊）』奈良県立橿原考古学研究所 2015
- 高見友幸『摩訶大将棋の復刻 ―古代日本の大型将棋に関する考察―』大阪商業大学アミューズメント研究叢書 19 大阪商業大学アミューズメント産業研究所 2019
- 瀧浪貞子『平安建都』集英社 1991a
- 瀧浪貞子「初期平安京の構造 ―第一次平安京と第二次平安京―」『日本古代宮廷社会の研究』思文閣出版 1991b
- 瀧浪貞子「大内裏の構造」古代学協会ほか（編）『平安京提要』角川書店 1994
- 竹田晃・黒田真美子（編）『広異記 玄怪録 宣室志他』明治書院 2008
- 張沛「旬陽発現宋代窖藏」『文博』4 陝西人民出版社 1988
- 東野治之「南都宮域図残欠について」『古文書研究』20 日本古文書学会 1983
- 福建省泉州海外交通史博物館（編）『泉州湾宋代海船発掘と研究』海洋出版社 1987
- 松岡信行「将棋伝来の『謎』に挑む（上）」『将棋ペンクラブ』2009年春 51 将棋ペンクラブ 2009
- 松岡信行『解明：将棋伝来の『謎』 一条帝宮廷サロン将棋発祥説の開陳』大阪商業大学アミューズメント研究叢書 15 大阪商業大学アミューズメント産業研究所 2014
- 桃崎有一郎『平安京はいらなかった』吉川弘文館 2016
- 山中章「古代条坊制論」『考古学研究』38-4 1993（『日本古代都城の研究』柏書房、1997年所収）
- ランドルフ アレックス「将棋とチェス（1）将棋とチェスの歴史の一面」『将棋世界』3月号 日本将棋連盟 1971
- 한울문화재단연구원（編）『鐘路清進 5 地区遺蹟Ⅰ・Ⅱ』한울문화재단연구원 2012
- Murray, H.J.R. *A History of Chess*, Oxford University Press, Oxford, 1913

